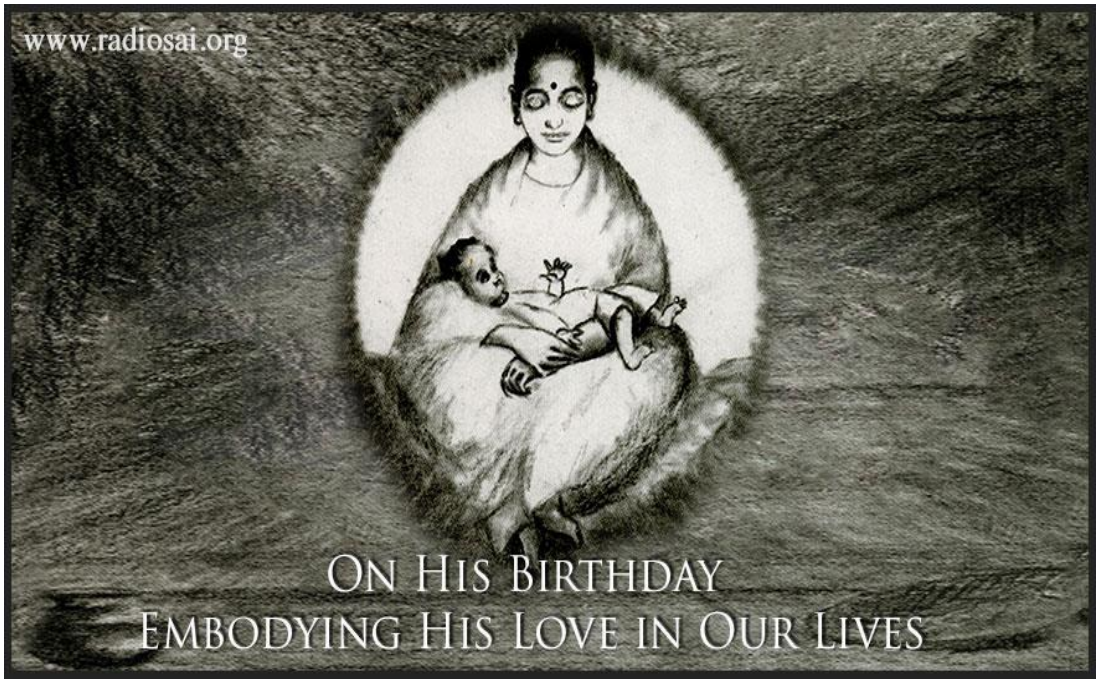
スワミのお誕生日に、人生の中でスワミの愛を体現する



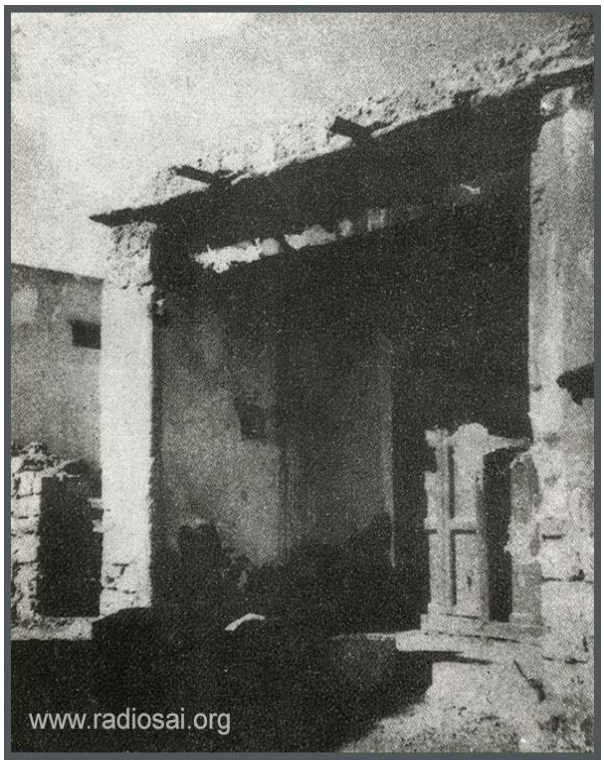
1926 年11月23日は、「決して衰えない、永遠に満たされた」を意味するアクシャヤ年〔テルグ暦60周期の1つ〕のカールッティカ・ソーマヴァーラ（神聖なカールッテイカ月の月曜日）で、その日はシヴァ神に礼拝を捧げる日でした。

神が選んだ質素な家

その日の早朝、村人たちがシヴァの怒りを鎮めるため一心不乱に祈っていた時、言葉で言い表せないほど魅力的な赤ん坊が降臨しました。左頬の小さなほくろ、眉の上の筋肉のくぼみ、そしてほのかに光を放つ顔をひときわ輝かせる天使のような微笑み――それはまさに抗うことのできない魅力でした。誰もが彼から目を離すことができませんでした。

何年も後になって、バガヴァンの長年の帰依者である N.ジャヤラクシュミー博士は回想したものでした。

「私は、バター壺の横にしゃがんで中身を食べているクリシュナの絵を持っていきました。それは、有名な芸術家が描いたもので、私の部屋のカレンダーから取り外した大きな写真でした」



「イーシュワランマ様はそれを見ておっしゃいました。『そうそう！彼（スワミ）の顔はこんな風に、月のように輝いていたわ！これと同じ黒い巻き毛だったのよ。筋肉はたくましくて形がよくて、でも眉はクリシュナの眉と違って、真ん中でつながっていたの』。そして、クリシュナが身に着けている宝石を指差して、イーシュワランマ様はため息をつきました。『だけど私たちは貧しかった。この子（クリシュナ）が身に着けている宝石を彼（スワミ）に与える経済的なゆとりはなかったのよ』」

意志しただけで小石の山を真珠の山に変えることができるお方は、石の壁と茅葺（かやぶき）屋根で作られた小屋で生まれることをお選びになったのです。

ペッダ・ヴェーンカマ・ラージュの家は簡素な部屋が2つあるだけで、そのうちの1つは食料用の穀物を保管するために使われていました。そのため、もう1つの部屋が唯一の居間でした。台所は小さな通路を横切ったところにありました。屋根には、溜まった雨水の流れを調節するために数本の木柱が少し傾斜をつけて水平に置かれていました。これをさらに数本の支柱が支えていました。瓦の代わりに、竹のマットが木枠の上に敷かれ、壁に釘で打ち付けてありました。石灰と漂白剤の漆喰が屋根の上の防水材に使われていました。

これが、幼いサティヤが這い這いをし、眠った住居だったのです。そして、母のイーシュワランマは、他の赤ん坊と違って、この小さな子は決して泣かなかった、と述べています。（たった一度、素晴らしい後光の輝きを見せるため、彼女の気を引こうとして泣いた時を除いては） この赤ん坊は、どんな時もいつも笑っていたのです。

愛の人生を送るためのレッスン

時が経っても、サティヤは決して特定の食べ物や衣服を求めたりしませんでした。ヒンドゥプルやアナンタプルの町から服の束が運び込まれ、父親や祖父などの年長者の１人が、好きなものを選ばせるために家の男の子たちを呼びました。しかし、サティヤは他の子たちが自分の服を選ぶまでいつも離れたところで座っていました。それから、何であれ他の子が選ばずに残ったものを取りました。サティヤには、自分自身の望みや願いというものがまったくないように

思われましたが、他の子供たちが楽しそうにしているのを見ると、サティヤの顔は光り輝きました。

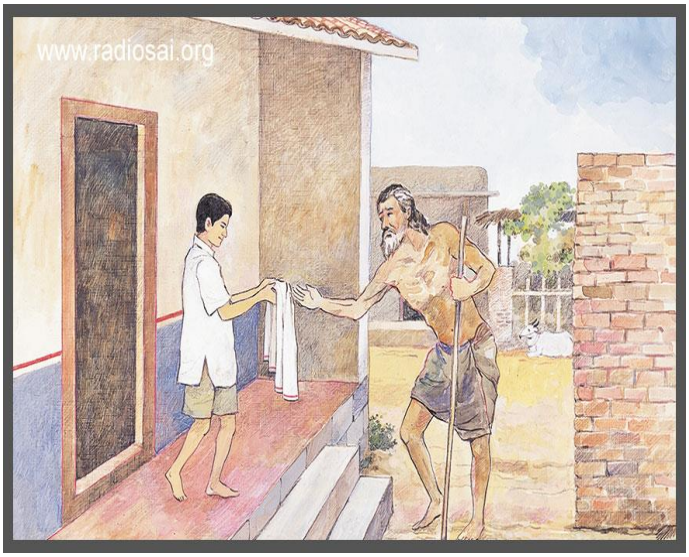
母イーシュワランマは回想しています。「私はよくサティヤを抱きしめ、彼の願いを聞き出そうとしたものよ。『サティヤム、欲しいものを言ってごらん。私がおまえにあげるから』と言うと、『何もいらないよ』と答えるだけなのです。『お母さんがくれるものなら何でもかまわない。それで十分だよ。僕は選ばないんだ』と。もっと好き嫌いがあって、はっきり自己主張してくれればよかったのに」・・・ それが母の悲しかったことでした。

しかし、いつも絶え間なく他人の幸福と安寧のために働いている者が、どうして自分自身と自分の快適さのために何か求めることなどできるでしょう？

愛は、取るのではなく与えることによって生き、集めるのではなく分かち合うことによって生き、収集するのではなく振りまくことによって生きる。

物乞いが戸口にやって来て懇願するたびに、サティヤは遊びをやめて走り寄り、姉妹たちを説得して、その物乞いに食べ物を与えました。そのうち、年長者たちも（サティヤ）がそのような親切な行為を続けることに我慢できなくなりました。時々、イーシュワランマはサティヤを捕まえて、警告するように指をつき上げて言いました。「いいこと！おまえは空腹な人に食べ物を与えるけれど、気をつけなさい。これではおまえが飢え死にしてしまうわよ！」。それに答えて、サティヤはただ中へ駈け込み、食べ物を持ってきては空腹な人に差し出し、喜んで自分の食事から遠ざかるのでした。そうなると何も、誰も、食事をするようサティヤを説得することはできず、食事は手つかずのまま残されました。

愛は犠牲になることを愛し、他の誰かを輝かせるために自らを滅することを喜ぶ。



物乞いの懇願を聞くたびに、サティヤの小さな黄金のハートは、哀願するような目で年長者たちを見たものでした。まるで、貧困にあえぐ人々に食べ物を与えて欲しいと言わんばかりに。そして、サティヤは自分の納得いくようそれが行われるまでは、決して諦めませんでした。サティヤが通りを走り回るようになると、サティヤは体が不自由な人や盲目の人、よぼよぼの老人、病気の人を探し出し、彼らの手を引いては家の玄関先まで連れてきました。そうすると、姉妹たちは台所やお店から穀物と食料を調達し

て、彼らの器に入れなければなりませんでした。“小さな救世主”は、喜んでその様子を眺めていました。

愛は気遣い、慰め、守り、提供し、手を差し延べ、抱擁するチャンスを逃さない。

時おり、村のわんぱく小僧たちがサティヤのいる前で鶏を逆さに吊るして持ち歩いたり、犬を蹴ったりすることがありました。それを目撃すると、サティヤはいたたまれなくなったものでした。これからの食事のために鶏が選ばれているのを知ると、サティヤはその鶏をぎゅっと胸に抱きしめました。事実、サティヤはとても愛情をこめて可愛がり、きつく胸元に抱きしめていたので、その鶏に純粋で寛大な愛情を注いでいるサティヤの様子を見た者は、誰もその翼を持った生き物を傷つける気がしなくなりました。

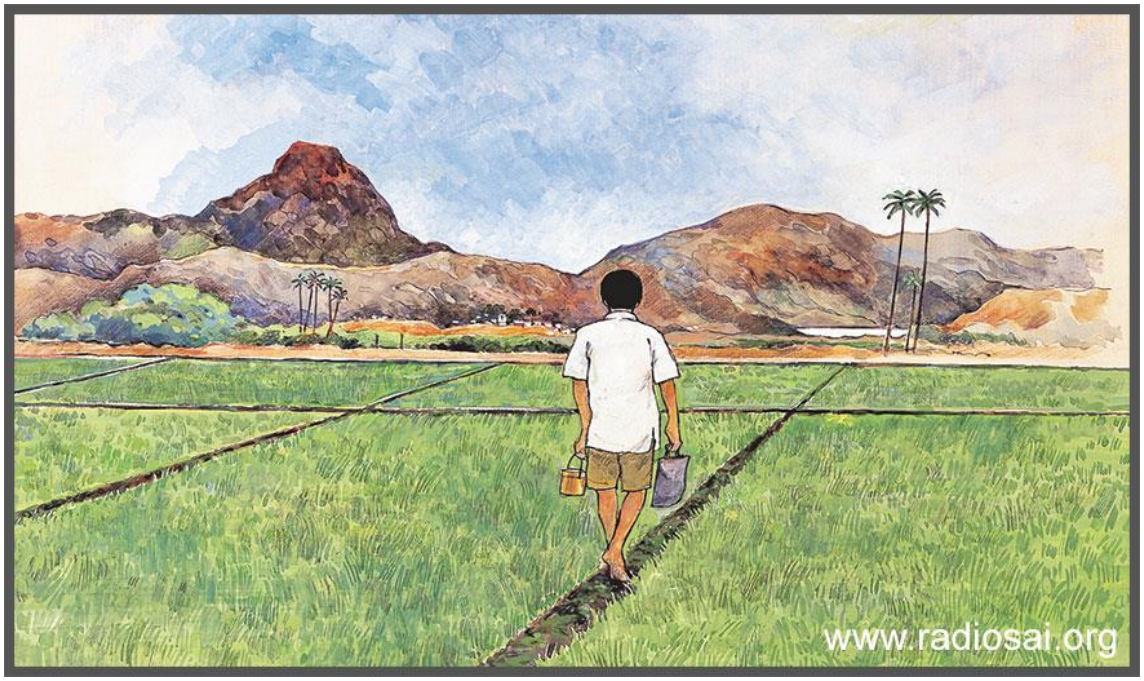
愛の強さが憎しみと敵意を上回るなら、愛はそれらに打ち勝つことができる。

サティヤの学校では、時間厳守を確実にするための興味深い処罰策がありました。遅刻した者は誰でも、理由の如何を問わず、杖で鞭打たれるというものです。真っ先に登校して先生に挨拶をした者が処罰を行う特権を与えられました。受ける鞭の数は、遅刻者のリストの順番に相当します。遅く着けば着くほど、より多くの鞭を受けなければなりませんでした。

寒い、薄い霧がたちこめる朝、子供たちは処罰を免れようとかなり早い時間から校舎の軒下に集まったものでした。そんな状況をかわいそうに思ったサティヤは、仲間の生徒たちが心地よく過ごせるよう、自分の家から衣服を何着か持ってきたものでした。家の者たちはこのことに気づき、あまり何もできないので、失う余裕のない衣服をすべて箱の中に入れて鍵をかけてしまいました。それでもサティヤは、いつもクラスメートを助ける方法を見つけるのでした。

愛は数々の試練に直面するだろう。心の狭い人々は、愛のために命の息の根を止めてしまうのではないかと考えて、それに抗うだろう。しかし、愛は高次の力、いや至高の力によって活力を与えられ、常に道を見つけるだろう。

プッタパルティとカマラープラムで最初の教育を受けた後、サティヤがさらに学びを続けるには、ブッカパトナムのサミティ小学校に行かなければなりませんでした。この学校はチットラーヴァティー川を渡って4キロのところにありました。サティヤは髪を梳かして、きちんとした服装で、毎朝その距離を歩きました。しかし、サティヤのもじゃもじゃの髪に面白がって『棘玉』を投げつけるわんぱく小僧たちがいました。サティヤは一度も仕返しをしませんでした。ただ、できるだけ早くその場から立ち去りました。



実際、ブッカパトナムでの学校生活は、14歳の少年には少々厳しいものでした。朝早くからプッタパルティで、自分と祖父の朝食と昼食の準備を済ませなければなりませんでした。それから、お決まりのラギーサンカティー（地元で栽培された雑穀を混ぜて作ったお粥）か、冷ご飯とカード（凝乳）の朝食を摂ったものでした。

サティヤが外出すると、学校での彼の新しい特別な地位（祈りの集会をリードしていた）に嫉妬した2、3人の年長の生徒たちが、サティヤを虐めることがありました。生徒たちは時々、砂の中にサティヤを乱暴に押し付けて、チットラーヴァティー川の水を浴びせかけ、きれいな服を台無しにしました。しかし、サティヤは決して取り乱したりしませんでした。明るく笑顔でその虐めに耐え、悪い感情は持たなかったのです。実際、そのような扱いを受けたにもかかわらず、サティヤは温かく心を配りながら、毎晩その生徒たちに勉強を教え続けたのでした。

サティヤは最もよくできる生徒だったので、当然ながらクラスのリーダーでした。かつて級長として、40人の生徒たちが犯した過ちのために全員を平手打ちするよう教師に命じられたことがありました。（サティヤはとても背が低かったので、実際それをするために椅子の上に立たなければなりませんでした）。しかし、サティヤは十分に強く生徒たちを叩きませんでした。ただ頬に優しく触れただけだったのです。これを見た教師はひどく怒り、どうすべきかをはっきりわからせるため、代わりにサティヤをお仕置きし、サティヤの頬を41回ほど激しく平手打ちしたのです。サティヤは文句も言わずにそれに耐えました。

愛は激しい苦痛に耐えるかもしれないが、それは常にヒマラヤのような忍耐で耐

え抜くだろう。なぜなら、愛は決して憎むことができないから。最終的に不可能に思われることを成し遂げるのは、この不屈の忍耐である。

ブッカパトナムにあるサミティ小学校の向かいには、ラクシュミー・ナーラーヤナ・スワーミー（ヴィシュヌ）、ラーマ、ラクシュマナ、シーター、そしてハヌマーン等のさまざまな神々の祭壇が 1 つになった寺院の複合施設がありました。サティヤは自由時間に友人たちとよくそこで過ごしました。地方自治体の職員だったグマガッタ・スッバ・ラーオと彼の妻ティッパンマは、ラクシュミー・ナーラーヤナ・スワーミー寺院の複合施設にある部屋の 1 つに住んでいました。夫妻の娘のナーガラクシュミーはその家でいつもシルディ・サイ・ババを礼拝していました。学校が終わるといつもサティヤはそこへ行って、彼女の礼拝が終わるまでスッバ・ラーオの礼拝室の隅でじっと待っていました。サティヤは毎日プラサードを持って帰ってきたものでした。

しばしば、サティヤはナーガラクシュミーが礼拝で使えるように、ティッパンマの家の玄関口に花を置きました。サティヤはブラフミン〔僧侶階級〕の家庭の出ではないので、最初のうちナーガラクシュミーはその花を受け取ろうとしませんでした。でもすぐにその偏見を克服しました。後に、彼女はバラバラの花から花輪を編む時間がなかったので、花輪の方がいいのに、と不平をもらしました（しかし一言も口には出していません）。驚いたことに、次の日からサティヤが自分で花輪を持ってきました。ナーガラクシュミーはこの上もなく喜びました。そして今まで以上に、より心をこめて礼拝を行うようになりました。

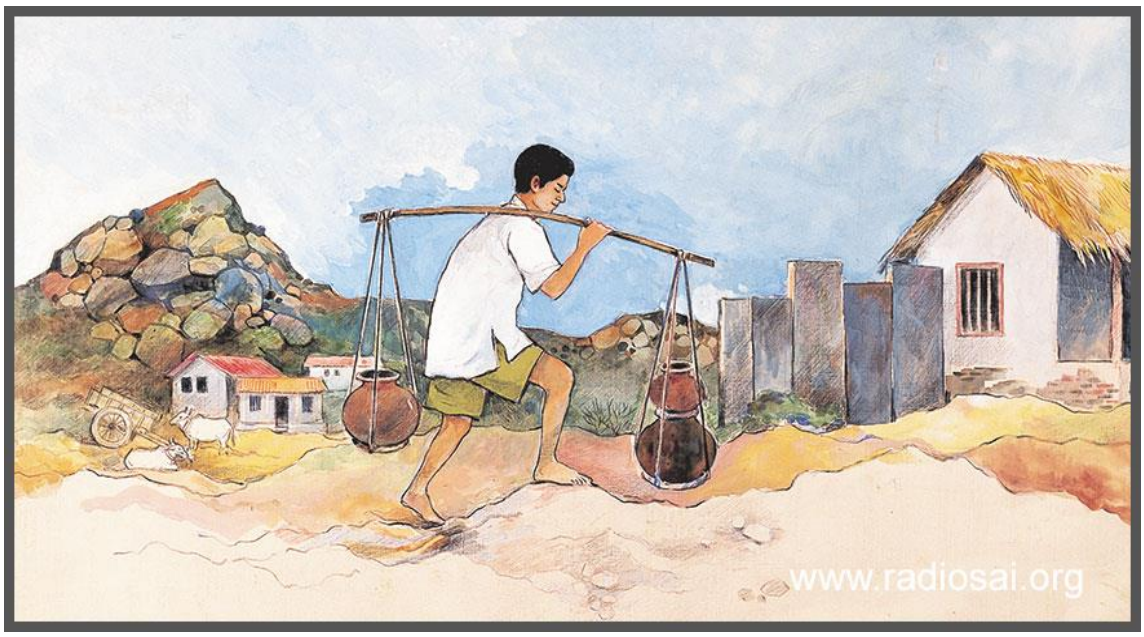
奉仕に従事する時、愛の感受性はこの上ない。言葉にできない要求に気づくだけでなく、驚くべき速さで、静かに、そして確実にそれを満たす。

ブッカパトナムで過ごした後、ウラヴァコンダに移ったサティヤは、兄のシュリ・シェーシャマ・ラージュの家に滞在しました。この時期のサティヤにとって最もやっかいな仕事は、家族が必要とする水をひっきりなしに運ぶことでした。

プッタパルティの実家に帰った時のことです。イーシュワランマは息子のサティヤに爽快な「オイル・バス（油浴）」をほどこしました。彼女はサティヤの頭、胴体、手足にゴマ油を塗りつけ、より丈夫に柔軟になるように筋肉をマッサージして、せっけん液と温かい水をかけて油を洗い落としました。

これをしていたある日のこと、イーシュワランマはサティヤの左肩に黒ずんで分厚くなった皮膚が長い線のようになっているのを発見しました。彼女は、布が触れたり押されたりしても、サティヤが痛みを訴えないことに気づきました。その痣（あざ）がどうしてできたのかを尋ねても、サティヤはただ笑っているだけでした。しかし、彼女が強く問い正すと、たぶん水がめを棒の両端に

吊るして肩にかけて運んでいたからだろう、と言いました。サティヤは、滞在先の兄の家族と世話になっている近所の2家族が毎日使うのに十分な水が得られるよう、井戸まで往復６回、朝夕3回ずつ(水がめを運んで)歩かなくてはならなかったのです。



　イーシュワランマはこれを知るとすぐに言いました。「そんなところからは出て行くべきだわ。彼らはおまえの優しさと人に奉仕したいと思う気持ちに付け込んでいるのよ。なぜ水を運ぶのにおまえを頼らなくてはいけないの？」 しかし、それを遮ってサティヤは言いました。
　「アンマー(お母さん)、僕はそれを自分の務めだと思っているんだ。塩辛い有毒な水でどのくらい子供たちが生き延びられると思う？　お母さん、僕は喜んでその遠くの距離から、命の水を運んでいるんだ。僕はこの奉仕をするために来たんだよ」
　イーシュワランマは何と言ってよいのかわからなくなりました。

愛は、誰かに仕えるとき危険を冒す。そして頼まれれば、限界を超えるギリギリまで精一杯のことをしようとする。しかし、決して困難に不平を言ったり、きちんとやるべきことを妥協したりしない。それどころか、愛はその顔に明るい笑みを輝かせ、でき得るすべてのことを行うだろう。

　このようなシュリ・サティヤ・サイの聖なる物語から、どんなことでもあなたの手本にしてみてください。そうすればあなたは、この数百万のカット面を持つ愛のダイヤモンドであるサイの感動的な展望を解き明かし続けることでしょう。

　86年間、『2本の足で歩く愛』の素晴らしいサーガ(英雄伝説)を目撃し、その後2年間、それらの光景を味わい深くふり返って、今、私たちはスワミの89回目のご降誕祭を祝っています。

ふと思い立って、スワミが1989年の彼のご降誕祭になさった御講話を開くと、このメッセージの始めの一節が目に留まりました。

地球の中心に
プッタパルティという場所がある
ここにアートマの化身が
その神聖なる誕生を決意した

人類が科学の知識を求めている間に
ここに大学が出現した

あらゆる国から人々が集い
ここで限りなき喜びと平安を発見した

徳高い人々や高貴な人々が無数に押し寄せて
この地をあふれんばかりに満たした

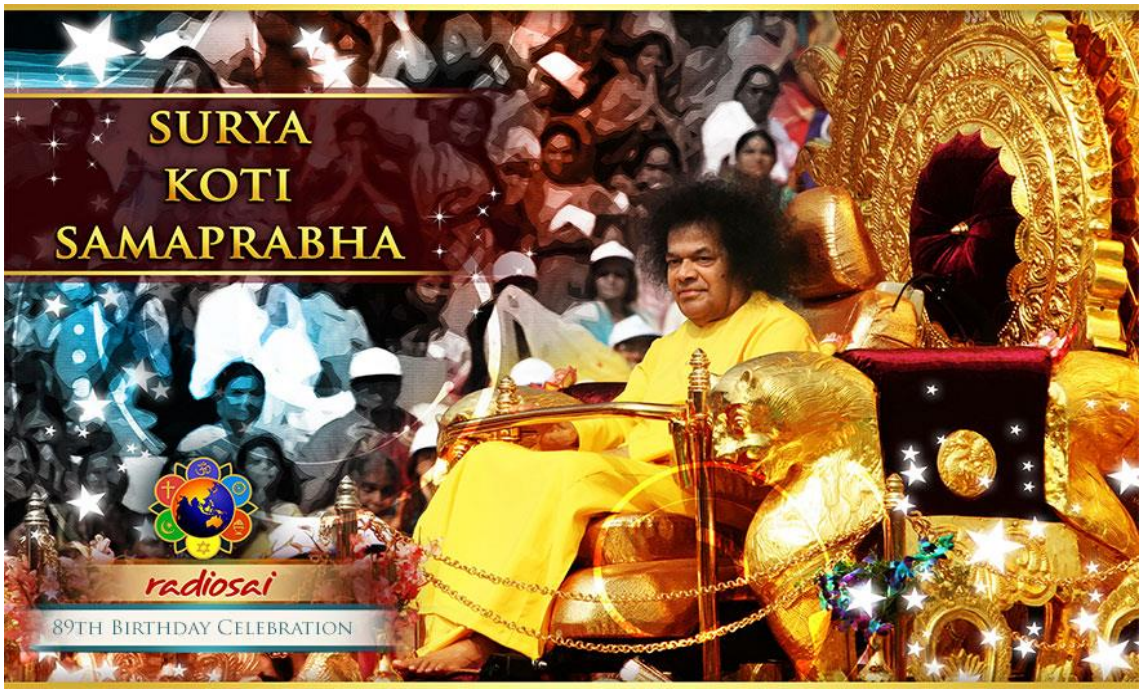
世界に愛を教えるため
すべての宗教の真理を教えるため
主なるサイは降臨した

サティヤ・サイは愛の化身として転生した
すべての者をその両腕に抱きしめて
すべてのハートを無上の至福で満たすために

明らかなことは、もしプッタパルティが今日、世界を席巻する霊的革命の中心地へと変容しているなら、もしサイという御名が即座に何百万もの人々のハートに最も高潔な感情を呼び起こすなら、もし平安と至福を求めて無数の人々がこの小さな村に集まるなら、もし世界の隅々から大勢の人々が、便宜や制約を気に留めず、何の期待や条件も付けず、援助と慰めが必要な無数の人々に心から救いの手を差し伸べるなら――これらすべては、ただ1つの理由のために起こっています。

それは、スワミが神の力と恩寵で奇跡的な御業を行って人々を祝福したからではなく、何人かの人々を末期の病状から癒したり、人々の家の祭壇からヴィブーティを出したり、夢に現れて最も差し迫った個人的な問題について助言したりしたからでもありません。ましてや、巨大な社会福祉事業として、現代の奇跡以外の何ものでもないさまざまな施設を建てたからではありません。また、スワミの素晴らしい御講話が啓発的であったり、その歌声が（人々の）心を高揚させたりするからでもありません。

それはただスワミがおっしゃったように、スワミが“具現化された愛”だからです。すべてはここから流れるのです。私たちが経験する一切は、ただこの愛の反映であり、この深遠な太古からの真理を現し、証明しているのです。



「憎みたいと思っても、私は憎むことができません」と、スワミは1960年代におっしゃいました。

「すべての人は、自分の色メガネをかけて世界を見ています。心配メガネをかけている人もいれば、貪欲メガネをかけている人もいます。第3の種類の人々は嫉妬メガネなどをかけています。しかし、私は愛のメガネだけしかかけません。それが私の本質なのです」

愛が深く触れる時・・・

P. サイ・グナランジャン氏はシュリ・サティヤ・サイ大学の卒業生です。彼は、教育、健康、環境の分野でインドの農村部の社会的発展に貢献する非政府組織（NGO）の創設者です。

いくつかの企業で7年間働いた後、2009年にこの新しい試みを始めた時、グナランジャン氏はこの NGO にすべての貯金をはたきました。そして、現在まで 1 ルピーの給料も受け取っていません。衣服は2組、移動は公共交通機関、1 日 1 食で済ませ、事務所の床で眠り、最小限の機能の付いた携帯電話を使って、何とかやりくりしています。

「どういうきっかけで、そこまでするよう鼓舞されたのですか？」と、かつて彼に尋ねたことがあります。私は興味をそそられたのです。彼はサイの帰依者の中でも真のエリートの部類に属しています。

「そうですね・・・」と彼は微笑んで、静かに続けました。「私は小学校から2つの大学院課程まで、バガヴァンの学校と大学で19年間学んできました。私はここでとても多くのものを受け取りました。世俗的な良い教育だけでなく、体と心と魂のための多くスキルも身につけました」

「しかし、スワミと過ごした長い日々の中で、スワミは一度もおっしゃったことがないのです。『学生諸君、私は君たちに無料で教育を授けています』とか、『私は君たちと非常に多くの時間を過ごし、多くの良いことを教えています』とか、『ほら、私は君たちに特別な講話や内輪の授業をしてあげたのですから…今度は君たちがお返しに私にこれをする番です』などとおっしゃったことは一度もありません。『よろしい。私がしてあげた多くのことのお返しに、1年間無料で

私の大学で働くか、田舎の孤児を1人養子にするか、毎年少なくともこれくらいの額をトラストに寄付してください』。スワミは、こういった種類のことは決しておっしゃらないのです。絶対にありません。スワミは与えてくださるだけです。それは、最も純粋な形を取った、真実で本物の無条件の愛でした。今、私が取り組んでいる一切のことは、スワミという存在、スワミが表していらしたもの、スワミが教えてくださったことを、ほんのわずかでも反映させて人生を送ることなのです。こうすることが、毎朝私の魂を静め、私の両腕と心に翼を与えてくれるのです」

1989年のご降誕祭の御講話が終わりにさしかかった頃、スワミはおっしゃいました。

「不変の神のみが永遠の至福を授けることができます。このことは世俗的な関心を手放すという意味ではありません。あなた方がしなければならないことは、世俗的な生活を、神を実現するための基盤にすることです」

では、どうやってそれを行えばよいのでしょう？

利益から平安へ. . . 愛は至るところで働く

先日、タミル・ナードゥ州に拠点を置く製薬会社、SKN オーガニックス Pvt. Ltd の代表取締役である T.N.シェーカル氏にお会いしました。ある日、製造工場の業務部長がパニックになってシェーカル氏を呼び、震えながら工場の一部で火災が起こったことを報告しました。業務部長は言いました。「多くの在庫と機器を失ってしまいました」。シェーカル氏は即座に答えました。

「この損失は、一日一日過ぎていくのにまだ自己実現を達成できないという、私たちが毎日経験している損失の額（量）に比べれば、何でもないことだ。だから心配しなくていいんだよ」

シェーカル氏はビジネスに向かないのだと結論づける前に、彼の会社が過去10年間、毎年20～25%の成長を続けてきたことを知れば、皆さんは驚かれるかもしれません。しかし、シェーカル氏は彼が生まれた小さな村、ティルナガリに住んでいます。会社の取締役会議が開催され、CEO（企業のトップ）たちがさまざまな業務を日々運営するために彼に相談するのはここなのです。彼はなぜここに住んでいるのでしょう？ 「理由は、そうすれば最大限の時間をこの村と私たちが採用した周辺の8つの村の発展に捧げることができるからです」。当然のことのようにシェーカル氏は言います。「私は、私の仕事を管理する有能な人材を見つけることができます。あそこ（都会）には競争があります。しかし、セヴァ（奉仕）をするのに競争はありません。私はあそこ（都会）よりも、ここ（田舎）でより必要とされているのです」

理由は他にもあります。

「社外の人間のような目で、距離をおいて自分の会社を見つめてみると、実際、よく全体像

を見渡すことができます。考え方が広がり、決して視野が狭まったり限定されたりすることはありません。ですから良い決断を下せるのです。それに加えて、あなたのコンパス〔羅針盤：進むべき方向を示すもの〕が無私の愛と正義であれば、正しい選択をするのにほとんど時間はかかりません。**事実、会社の問題に対するすべての答えは、お祈りをしてからこれらの地域のナガラサンキールタンに出かける早朝の時間帯に得られます。これは1987年以来、私がずっと続けていることです。これは、何があろうと妥協することのできない私のサーダナ（霊性修行）なのです」**

彼が採用した村の１つをいつものように巡回中のシェーカル氏（右端）

「あなた方の組織の目標は何ですか？」
私は彼らが他の会社のような普通の目的を持っているかどうか知りたくなりました。

「他の組織は、会社を発展させるために人を使います。ここでは、人を向上させるために会社を使うのです。人々を真理とダルマを命の息吹として大切にする賢明な人間に育てます。そして、私たちは愛を通してこれを行っています。先日、工場のある警備員がしばしばお酒を飲んでいるので、その警備員を解雇する許可がほしいと上司の者が言ってきた時、私はその上司に尋ねました。『あなたは彼に十分愛情をかけてきましたか？　本当にそうしようと努力しましたか？』」

「いったん従業員が私の会社に入ると、私はその人を養子のように扱います。そして一人ひとりにとても愛情をかけるので、彼らは人間的価値を重んじる人間に変容するのです。20年以上前、たぶんスワミが私に話しかけられたのはこの時だけだったと思いますが、スワミはこ

うおっしゃいました。**『あなたのサーダナを続けなさい。後のことは私が面倒を見ます』。**心の底からすべての人を愛すること――私にとってはこれがサーダナです。これをすれば、すべてが上手くいきます。売上や利益はたいしたことではありません。他の人たちもスワミの愛の中で成長できるように、私はスワミの愛の中で生きて働くだけなのです」

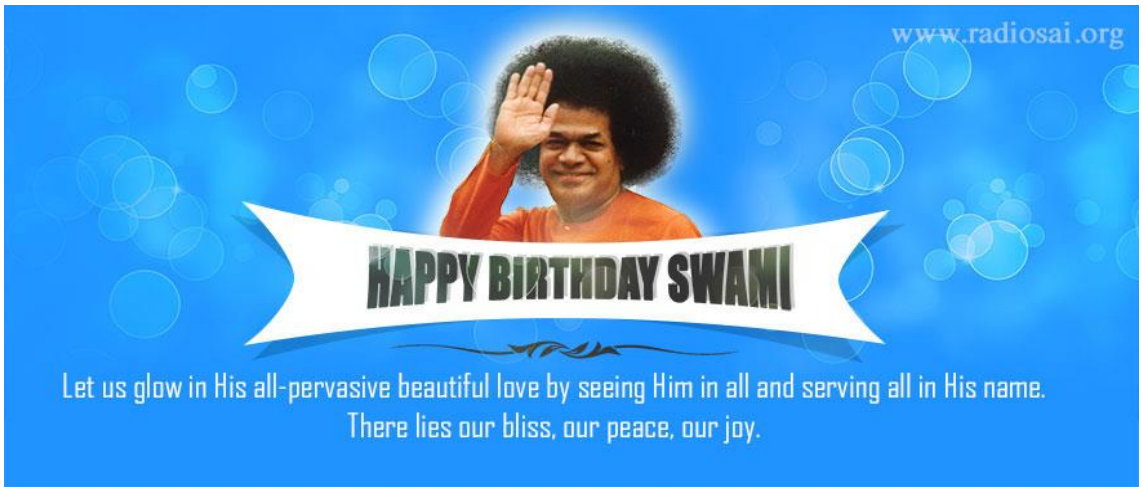
お誕生日の幸せ

11月23日の朝、帰依者たちはスワミに「ハッピーバースデー（幸せなお誕生日を）」と願ったものでしたが、バガヴァンはいつも、愛情を込めてこう言葉を返されたものでした。

「私はいつも幸せです。あなた方が幸せでいなさい！」

そして、私たちは何かをするたびに、スワミのためにそれをするなら、本当に幸せになれます。耐え忍ぼうと努力するたびに、スワミのためにそれを耐え忍びます。涙を流すたびに、スワミのためだけに涙を流します。声を上げるたびに、スワミのために声を上げます。そして微笑むたびに、私たちはスワミが微笑んでいらっしゃることを知っているから微笑むのです。と言うのも、スワミは私たちの周りに、後ろに、前に、上に、下に、私たちと共に、私たちの中にいらっしゃるからです。すべての人の中にスワミを見て、スワミの名の下にすべての人に奉仕することによって、遍満するスワミの美しい愛の中で成長しましょう。そこに、私たちの至福、平和、喜びはあるのです。

―ヴィシュ・プルスティ（ラジオ・サイ・チーム）

※この記事の内容と写真の一部は書籍"Love is My Form"から引用しています。著者の R.パドマナバン氏に感謝いたします。

出典：http://media.radiosai.org/journals/vol_12/01NOV14/On-His-Birthday-Embodying-His-Love-in-Our-Lives.htm